

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 5 日現在

機関番号：11301

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2011～2013

課題番号：23652110

研究課題名(和文)日本語学習者の心的文法に関する基礎的研究

研究課題名(英文)A Fundamental Study on Mental Grammar of Japanese Language Learner

研究代表者

名嶋 義直 (NAJIMA, Yoshinao)

東北大学・文学研究科・教授

研究者番号：60359552

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 800,000円、(間接経費) 240,000円

研究成果の概要(和文)：日本語学習者がノダ文をどのような点に着目してメタ的に理解しているかを明らかにするために、韓国学習者・中国学習者に対し質問紙調査を実施した。調査結果を分析したところ、双方の学習者に共通の特徴として「ノダと文脈との関連」を十分に理解していない点、語用論的な理解の欠如という点が明らかになった。両学習者群を対照してみると、韓国学習者の方が語用論的な理解が相対的に強く、中国学習者は意味論的・構文論的理解が強いことが明らかになった。このことは学習者に応じてノダ文の教え方を考慮する必要があることを意味する。

研究成果の概要(英文)：How do Japanese language learners understand Japanese grammar? To clarify it, I focused on the point of view of meta cognition, and carried out a questionnaire survey for Korean learners and Chinese learners. Analysis revealed that; as a common feature of both learners, it does not fully understand the importance of context and there is a lack of understanding of the pragmatic feature of Noda - statement. By contrast both learners groups, Korean learners were relatively understanding of the pragmatic conditions, but Chinese learners were not. They were relatively understanding of semantic a syntactic features. This means that it is necessary to consider how to teach Noda - statement according to the learners.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・日本語教育

キーワード：心的文法 ノダ文 韓国学習者 中国学習者 対照研究

1. 研究開始当初の背景

近年、日本語教育シラバスの見直しが行われている。一方、第二言語習得研究の進展と共に、学習者が「独自の文法規則」を形成していることが明らかになってきた。しかし、その多くは研究者による誤用からの帰納的推論による結論付けであり、本当に学習者がそのような「独自の文法規則」を形成しているか否かは明かではないことが多い。したがって、このままでは教師の視点からシラバス構築が行われる恐れがある。学習者が有している「独自の文法規則」の内実を今まで以上に明らかにする必要がある。

2. 研究の目的

これまで日本語教育において、日本語文法がどのように教えられ、どのように理解されてきたのかについて調査し、学習者がどのような「独自の文法」を構築してきたかを明らかにする。そして、個々の学習者が持っている「心的な日本語文法」の実態を明らかにする。それらの考察を通して、近年盛んになりつつある「コミュニケーションのための日本語教育文法」の構築に対し、教授項目の選定やその記述等、シラバス構築に資する基礎的資料を提供することを目的とする。

3. 研究の方法

(1) 学習者におけるノダ文の理解、ノダ文に関する心的文法の実態を明らかにするため、日本語学習者人口が一位と二位とされる韓国と中国の大学生に対し、質問紙調査を行った。質問紙には頭に思い浮かぶノダ文の「例文」を思いつくまま思いつくだけ日本語で記入すること、併せてその例文を使う「文脈」とその例文の「用法」についても記入することを求めた。「文脈」と「用法」については母語で記載しても日本語で記載してもよいこととした。

(2) このような構成としたのにはいくつかの狙いがある。まず、例文を実際に産出する

ことで心的文法に表象を与える過程を与え、それによって学習者の中にあるノダ文の理解の一端を顕在化させることを意図したからである。思いつくまま思いつく順に思いつくだけ書くよう指示したのは産出された順番を確定することで心的文法へのアクセスのしやすさを測りプロトタイプ的な例文を考える一つの根拠とするためである。

(3) ノダは形態的にはダロウ・マイや終助詞などを除きほとんどの言語形式に後接できる。形態上ノダ文を作ることはそれほど困難ではない。しかし、同一形態のノダ文が文脈如何で異なる意味・機能を持つことがごく普通に起こる。そのためノダ文の意味・機能を分析する際には文脈に関する情報が不可欠である。そこで、産出された例文の意味や機能を的確に分析するため、例文だけではなく「文脈」の記入も求めた。また、「用法」名の名付けも求めたのは、この情報が「文脈」と併せて活用することで産出された「例文」の意味・機能を分析するに役立つだけでなく、回答者が自分の産出したノダ文の意味・機能をどのようにメタ的に認知しているかを知ることに役立つと考えたからである。

(4) その調査結果を、まず韓国学習者データと中国学習者データに分けて分析・考察した。そのあとで、双方の比較・対照を行った。

4. 研究成果

(1) 2011年度の研究成果

2011年度は、研究者自身が東日本大震災と福島第一原発事故で被災したため、当初予定していた計画通り進めることができず十分な成果を上げることができなかった。韓国の2大学・中国の1大学で質問紙調査を実施したことは成果であるが、分析・考察を行い、研究成果を公表するまでには至らなかった。

(2) 2012 年度の研究成果

2012 年度は 2011 年度の遅れを取り戻すべく中国で追加の調査を行う予定であったが、日中間の政治情勢の急変を受け、調査研究のための渡航を 2 度にわたり中止せざるをえなくなった。そのため、2012 年度は 2011 年度に実施した調査の分析・考察を中心に行った。まず、2011 年度に韓国 2 大学で行った調査結果を分析・考察し、日本語文法に関する代表的な学会において招待発表を行った。この発表では、韓国人学習者の心的文法の一部を明らかにするとともに、本研究が収集して分析した学習者データからノダ文の意味機能について再考を必要とすることを述べた。本発表においてこの理論へのフィードバックは大きなインパクトを持つものであった。次に、中国の 1 大学で行った調査の結果と分析については、香港で行われた国際シンポジウムと沖縄で開催された日本語教育研究会において発表した。実際に調査を行った国である中国における国際都市香港、中国台湾と結びつきの強い沖縄で発表を行ったことは、「学習者の心的文法」を明らかにする本研究の課題にふさわしい形で研究成果の公表であったと考えられる。また、これらの研究の展開として、日本語用論学会においては、本研究で得られた知見をより大きなテーマに発展させ、若手研究者の育成を目的に東北大学と他大学の大学院生を組織してワークショップを行った。国内の代表的な学会で発表やワークショップを通して研究成果を公表したり発展させることができたこと、本研究と密接な関連のある外国の国際会議において研究成果を公表することができたことは、本研究の成果として十分な意味を持つと考えられる。

(3) 2013 年度の研究成果

2012 年度の研究とその結果の公表からいくつかの課題が明らかになった。まず、韓国人

学習者のデータの分析にやや不十分な点があったという点である。また、韓国人学習者の分析と中国人学習者の分析とを比較対照して総合的に考察するということができなかった。これらの問題を解決するためには更なる分析・考察を行い、ふさわしい場所で成果を公表する必要がある。そこで 2013 年の研究においては、上記 2 点の研究を目標とした。まず名古屋大学において開催された日本語教育に関する研究会において口頭発表を行った。この発表では、残された課題であった韓国人学習者データの分析と、部分的ではあるが、韓国人学習者のデータと中国人学習者のデータを比較したことに意義がある。その研究会でのフィードバックを受けて考察をさらに深め、中国の延辺大学で開催された国際フォーラムにおいて口頭発表を行った。その発表では、韓国人学習者と中国人学習者とのデータの比較に重点を置いた。延辺大学は中国の朝鮮人自治区にある大学であり、日本語学習者としての韓国人学習者と中国人学習者との比較を行った研究を発表する場としてこれ以上ない機会であった。国際会議には中国人研究者はもちろん、韓国人研究者も日本人研究者も多数参加しており、韓国人学習者と中国人学習者との比較という本研究の成果を、複数国の研究者に同時に発信することができたことは、大きなインパクトがあったと考えられ、本研究の価値を十分に認めることができるものであると考えられる。

5 . 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 3 件)

名嶋義直(2014)「ノダに関する心的文法 - 中国人学習者と韓国人学習者との比較 -」, 『日本語文化研究』第三輯, 延吉大学出版社, 査読有, 印刷中.

名嶋義直(2014)「ノダ文に関する語用論的考察 韓国人日本語学習者の場合」, 『第

九回国際日本語教育・日本研究シンポジウム
2012 論文集』, 査読なし, 掲載確定.

名嶋義直・小山友里江・梅木俊輔・エミ=インダープリヤンティ(2013)「語用論研究から日本語教育へ,日本語教育から語用論研究へ」2013.12.1,『日本語用論学会 第15回年次大会プロシーディングス』, 査読なし, 掲載確定.

〔学会発表〕(計6件)

名嶋義直(2013)「ノダに関する心的文法 中国人学習者と韓国人学習者との比較」, 第三回中日韓朝言語文化比較研究国際シンポジウム,2013.8.20.(於 延辺大学/中国, 延吉市)

名嶋義直(2013)「メタ的に産出したノダ文の文法的特徴に関する一考察-中国人学習者と韓国人学習者との比較-」, 第11回日本語教育研究集会,2013.8.5(於 名古屋大学)

名嶋義直(2013)「ノダ文に関する心的文法について 中国人学習者の場合」沖縄県日本語教育研究会 2012年度第3回研究発表会 2013.3.1(於 琉球大学)

名嶋義直・小山友里江・梅木俊輔・エミ=インダープリヤンティ(2012)ワークショップ「語用論研究から日本語教育へ,日本語教育から語用論研究へ」2012.12.1(於 大阪学院大学),

名嶋義直(2012)「ノダ文に関する語用論的考察 韓国人日本語学習者の場合」第九回国際日本語教育・日本研究シンポジウム 2012.11.24(於 香港城市大学/香港)

名嶋義直(2012)「日本語学習者が持つノダ文のプロトタイプの用法について」『日本語文法学会 第13回大会発表 予稿集』 pp.139-146. 2012.10.28(於 名古屋大学, 招待発表),

6. 研究組織

(1)研究代表者

名嶋 義直 (NAJIMA, Yoshinao)

東北大学・大学院文学研究科・教授
研究者番号: 60359552